

あなたの 職場

社会福祉施設等で働く福祉従事者から、今の仕事のやりがい、実際の業務のしやすさや職場で魅力的に感じることを聞き、「働きやすさ」につながるポイントを発見していくコーナーです。

「働きたい」気持ちと文化・生活のバックボーンを大事に (福)青丘社 生活サポートネットワークほっとラインでの取り組み

本紙ではこれまで、社会福祉施設において働きやすい職場を整える方法の一つとして、ICTを活用した働き方を紹介してきました。介護ロボットと業務を分担することで、職員が利用者と向き合う時間を作ることができる等、福祉サービスの質の向上にもつながる様子が見えてきています。

一方で、取材を通して、職員の「働きやすさ」につなげるには、テクノロジーで人手を増やしたりするだけでなく、休暇やシフトの調整、資格取得の支援等、職員それぞれの困りごとや要望に向き合い、労務面の整備も必要だとの声も聞かれてきています。今回は、職場環境の改善への取り組みについて、現場の声を聞いてみました。

職員にとっての「難しい」を支援する



お話をうかがったのは、(福)青丘社 生活サポートネットワークほっとライン(以下、ほっとライン)の李契順さんと姜玲玉さんです。ほっとラインは、障

害者・高齢者の介護支援、生活援助事業を行っている施設。施設のある地域には外国籍の住民が多いことから、利用者だけでなく施設で働く職員にも、さまざまな国籍・文化を背景にもつ人たちがいることが特徴です。その人たちが長く働いていけるよう、ほっとラインではさまざまな取り組みを行ってきていました。

「特に、日本語の読み書きに自信がなく、仕事が続

かないケースが多くあります。長く日本に住んでいて、会話はできても、記録をとったり資格をとったりするのに、日本語を読み書きすることが難しいんです」と李さんは言います。研修会等には通訳や代筆のできるスタッフに同行してもらったり、資料にはやさしい日本語で作成したり、記録を書いてもらう時にはローマ字を使う等、職員本人が理解してやり取りできるよう、支援してきました。

人に紹介できる「相談しやすい」職場として

李さんは、ほっとラインの職場をひとことで「休みをとりやすい職場」と答えてくれました。体調不良や介護、育児といった職員の事情に耳を傾け、シフトを調整し、無理せず働けるようにしていると言います。休みだけでなく、小さなお子さんのいる職員には同じ法人内の保育所や一時保育のサービスを紹介するなど、本人の働きたい気持ちと家庭の事情に、真摯に向き合っていました。姜さんは「職員本人と相談して環境改善に取り組んだことで、長期にわたって勤務している人や、外国籍の知り合いにこの職場を紹介している人もいますので、働きやすいと感じてもらえていると思います」と話します。

「職員本人の働きたいという気持ちと、自らが持つ文化や生活といったバックボーンを大切にすることで、本人の働く意欲につながっていくと思っています。そういうところを配慮できるようにしていきたい」と姜さん。アットホームな雰囲気職場を目指し、試行錯誤を続けています。

(企画課)